

## ペール・ラシェーズ墓地

珍しく晴れ渡った11月中旬のある日、こんないい天気の日にはアパートマンに閉じこもってはいられないと出かけることにした。目的地は6月はじめに訪れたペール・ラシェーズ墓地。ゆっくりと、人気を避けて一日を過ごすには恰好の場所である。それだけではない。11月1日は日本風に言うとお彼岸。多くの人が家族連れでお参りをしたはずだから、石ばかりの光景の中に、黄色を中心とした色とりどりの花々が色を添えてくれている。華美でなくしっとりとした雰囲気、パリの冬支度の呼吸を聞くことができるだろう。

アパートマンを出ると、いつもは右手に進むのだが、今日は左手に進む。そのままほぼ真っ直ぐ15分も歩けば墓地入り口につく。すぐ墓地の中には入らず外壁に沿って歩くことにした。外壁のまわりは道路に挟まれた小高い緑地帯となっており、そこは市民がそれぞれ憩うことができる空間と施設が整っている。長細い公園といえいいだろうか。

その公園内の壁にパリ・コミューンの彫像モニュメントが貼り込められている。大きさにして幅8m、高さ3mの石彫だから大作であるが、風雨にさらされくすんだ色になっているからだろうか、ひっそりとそこに存在しているという感がする。パリ・コミューンについてなにも知らないと同じ状態だった6月に見たときには、フランス革命の記念碑か何かかと思っていたそれは、パリ・コミューンのそれ。政府軍によってペール・ラシェーズ墓地にまで追いつめられ捕らえられた人たちが、その場で、無裁判のままに銃殺処刑（虐殺）された瞬間をモチーフにしたものであった。当時の壁を擬した背景の石積みの壁には無数の弾痕まで彫り込まれ、仰け反り、今倒れんとする老若男女10数人の、さまざまな姿態が浮き彫りにされている。深閑とした木々に囲まれ、わずかな空間をその前に残すだけの記念碑から、それらの人々の叫びが自ずと聞こえてくるような気がする。

「そこにいるあなたたち、私たちのこの死の瞬間から、私たちはあなたたち未来の人々に託したものがああります。それは政治はあなたたち市民が担うものだけということです。特別の人が担うとあなたたちは、いずれ、私たちの死を無駄にしてしまうことと同じ結果を生むのです。」

「いえ、政治だけではありません。働くこと、生きること、みんな、あなたたちが主人なのです。働かされている、生かされている、私たちはそうした社会の中で食うもならず、生きるもならずの暮らしを強いられてきました。あなた、主人の俸給が1.5フランの時に、卵1個3.25フランの生活なんて、信じられますか？私たちは、卵より安い値段なんですね。」

そんな生活が、そんな暮らしが、そんな安い労賃が続くような社会は、もう私たちだけでけっこうですよ。」

「ぼくら子どもだって同じさ。普通の子どもたちはキリスト教信者でなくても教会の修道士が先生をしていた学校に通っていた、しかもどんなに家が貧乏でも授業料がいったんだよ。それでも学校に行けたのはよかった方。パリ・コミューンの時に誰でも行ける学校が作られたけれど、それでも実際に学校に行けた子どもは半分しかいなかったんだ。お金があったり身分が高い人の子どもたちは家庭教師をつけたり、その人たちのための学校に行って、それから中学校に行っていたわけ。そういう人たちは結局社会の一番偉い人になれるような勉強を小さい頃からできていたんだよ。でも、パリ・コミューンの時に、勉強は誰でもできるしなくちゃいけない、これからの社会では工場で働くにしても知識と技術を持っていないとだめ、だから、誰でも学校で勉強できることは子どもの権利で、子どもを学校で勉強させることは親や社会の義務だって、世界ではじめて決めたんだ。しかも授業料もいないし、宗教などの特別な考え方に偏るのではなくて、これまでの人類が築いてきた知識や技術をしっかりと受け継ぎ、発展させていくべきだという考え方の教育が始まったんだ。

今、そこを歩いている君、君が受けている教育、ぼくらのコミューンで始めたことなんだ。…でも、それがけしからんことだ、と言って、賛成する人をみんな捕まえて…・ほら…こうやって…ぼくのように…銃殺されてしまう…。」

6月の時にはなにも聞こえてこなかった。陰惨・陰気、そんな感じを持っただけと言った方が正直なところだろう。歴史事象を活字でしか追ってこなかったぼくのこれまでの学習史は、歴史的現実をリアルに見ることには耐えられないほどの感性でしかなかったわけだ。それからほぼ半年。パリ・コミューンの絵画・写真・広報・議事録・判決録・ドキュメント等、さまざまな資料と巡り会え、フランス語がまったく不十分であるにもかかわらず、これまでの歴史的感性を覆されるほどに、「歴史の生の声」を聞き取るほどの感性を身につけたように思う。

この日の散策は、残念ながら、工事中のため公園内に入ることができず、柵の外から、木々の隙間にかいま見るだけに過ぎなかったけれど、それでもそこに10数分はたたずんでいたろうか。寒気が襲ってきたので、とにかく体を動かそうと、墓地内散策に切り替えた。

パール・ラシェーズ墓地は広大である。外壁に沿って歩けば道に迷わない、と言われる

ほど、中は入り組んでいる。とはいっても、所々に墓地案内図が建てられており、また、無数の箇所と言っていいほどに、通り名と番地が書かれているから、それさえ確認していけば、自分がどこにいるのか、そして出口へはどう行けばいいかは分かるのだが。この日は、以前歩いた道とは異なったところを無目的に進むことにした。

墓地だから当たり前のことだが、すべてが石の建築物。日本にかつて町の辻に建っていた交番と同じような形の墓もあれば、棺桶型のものあれば、平たい石碑が建てられその前に納骨スペースがあるのもある。さまざまな国の人が住んできたフランス・パリだから、それぞれの国の墓文化もあり、我が国のような均一性はない。交番形状はよく見ると屋根の上に十字架が立てられているから、おそらく教会を擬したのであろう。扉は、古くて壊れているものはともかくとして、固く閉じられている。が、扉には覗き窓がついており（これもまた、それぞれの墓によって、形状が異なり、一種の芸術性を感じる）、その窓から明かりが漏れてくる。覗き窓からすかしてみると、中には、メモリアルプレートがはめ込まれ、宗教画、あるいは宗教的なオブジェが飾られ、側面の壁にはステンドグラスの窓がしつらえられている。灯りが外に漏れていたのは、このステンドグラスのだったのだ。大きなものでは日本の我が家と同じかそれ以上のものもあり、小さなものはまさしく交番そのものの風体である。

これらの中で、肌色、黒色をした墓碑はおそらく最近のものであろう。もともとはすべて、パリの下から掘り出す石と同じ、石灰石と呼ばれる白い石のはずである。というのは、パリ街並みをつくっている建築物と同様に、さまざまな彫刻物がある。このようなものをフランスでは伝統としてきているので、石灰石でなければ容易なことではないからだ。彫刻物は、デスマスクあり、人物像あり、それはさまざまである。勲章を着けている胸像の前では、思わず、墓碑銘をしっかりと読む有様。アカデミー・フランセの会員だったとか、何とか学校の校長を長く勤めたとか、パリ・地下鉄の創始者だとか、なるほど、勲章にふさわしいメモリーが記されている。まさに、墓はこの世の人間模様そのものを映している。ちなみに、ナポレオンⅢ世の命によってセーヌ県知事となったオスマン男爵の墓も、ここにある。その墓は、高さ 5m、幅 3m、奥行き 4m ほどの大きさの、教会型墓であった。オスマンは今のパリの街並みを、ナポレオンの言うがままに、設計をし、建設した人である。

ある棺桶型の墓の蓋の上には、蓋いっぱい大きさであるからおおよそ 2.5m ぐらいの、若くて美しい女性が枕をして休んでいる石像があった。きっとこの墓の主、つまり、若くして亡くなった女性を、その身内が面影を残しておきたいと思って石像を残したのだらうと、

推測した。メモをしてこなかったのが氏名、生年没年月日を記載することができないけれど、19世紀に生まれ生き、80歳でその生涯を閉じた女性である。10代後半から20代前半に見えるその女性石像と当人は80歳で亡くなっているということとのギャップに、石像は単なる装飾なのだろうかと思えたけれど、ぼくは、思いを改めた。きっとこの女性の伴侶となった人は、心から愛し続けた妻の死を悼み、自分も妻も若々しいエネルギーに溢れていた出会いの頃を形として残しておきたかったのだろう、と。

同じように、生前の面影を偲ぶことができる墓、彫刻物がかなり多い。ペール・ラシェーズ墓地は学者・文化人など多数の著名人が葬られているので、観光ついでに立ち寄る人もかなりいる。ボンジュールと声をかけられあいさつを交わしたら、ギタリストの墓の場所を知らないかと訊ねられた。同じ著名とあっても、個人名がない墓が数多くある。それらにはその特徴を示す彫刻物が添えられていて、他とは異なる雰囲気漂わせている。肩に大きな荷を背負って急な階段を登っているのは、ナチによって強制労働をさせられ憤死したスペインの人たちの墓である。ナチによる虐殺はヨーロッパ中の国々の人になされているということが、この墓地に来れば一目瞭然である。また、第二次世界大戦で祖国防衛のために立ちあがったレジスタンスの人々もまた、政府によって捕らえられ、虐殺されている。フランスに住み、働き、フランス文化を身につけている「外国人」に対しては、ことさら厳しい弾圧がなされた。それらの人々を、今、それぞれの「母国」の人たちが追悼し、ここにメモリアルを残している。数百人の名前を刻む墓碑、数千人、数万人という数を刻む墓碑、そしてそれぞれに象徴される彫刻物は、「勲章」とは対照的な存在でもある。パリ・コミューンの碑は、ナチによる虐殺を銘記した墓々の近くの壁にある。3m×2mほどの大きさの石版の碑の前には、20mほどの範囲で、菊が咲き乱れ（鉢植え、ないしは土に植える）、カーネーション、バラの花の束が無数に置かれていた。ここも世界中から訪なう人々がいるのだ。それは、パリ・コミューンの遺産を受け継ぎ、発展させていく決意を持った人々なのだろう。

パリの秋から冬にかけての特徴である天候の急変のため、軽いいでたちでやってきた身にはしみるほどの寒さである。墓地散策をそろそろ切り上げる潮時だろう。もと来た道とは違う道を、一つひとつ墓を目の片隅にしながら、歩いてゆく。行く手には、ほとんど動かないほどの車が、石畳をこちらに向かってやってくるのが見える。その後ろには50人以上と思われる男女が、やはりゆっくりと進んでくる。葬列である。車とすれ違いざまに、

両の手を胸の前に組んで、首を垂れた。どのような人生を送ったのか、車の中の花いっばいに覆われた柩の主に問いかけてみたけれど、もちろん返事はない。葬列の人々は、我が国のように統一のとれた黒装束ではなく、思い思いの服を身につけている。もちろん、喪を表すのだから、彼らもまた黒っぽい服装が主流ではあるが。と、ふと気がついた、「火葬ではない!」。ぼくがほぼ半日かけて散策した墓地には、あの石棺、石室には、まさに亡骸が祭られていたし、いるのだ。日本では、よほどの特別な事情がない限り、火葬が法律で義務づけられている。ぼくの父のふるさとでは、今はどうなのだろう、叔父が亡くなった10数年前は、土葬に始まり葬列・葬儀が「八墓村」そのものを思わせる風習（我が細君の評）が残っていたけれど。

葬列が見えなくなるまで見送り、墓地の外に出た。体が心底冷えている。こんな日には、日本にいれば焼き芋や中華饅頭を、手のひらに転がし、そして包み、そしていただくに限るのだが、残念ながらここはパリ。アパルトマンに急ぐ道すがら、中華総菜の店をふと見ると、中華饅頭があるではないか。パリに来て、数多くの中華総菜の店に入り、あるいは見たけれど、中華饅頭を置いているのを見たのは始めてである。もちろん買い求め、レンジで温めてもらい、頬張りながらアパルトマンへと向かっていった。肉汁の甘さがじんわりと胃に収められていくのが分かる。至福のこの一時を、非日常食のネズミや猫、犬の肉を店頭で売られるが、それさえも買うことができなかったパリの多くの民衆の、しかし、今日のぼくたちにじつに多くの宝物を提供してくれたパリ・コミュニケーションの人々に、「忘れません」と誓って、散策を終えた。